

「意識のハードプロブレム」と「9か月革命」

古谷公彦
(大島社会文化研究所)

【目的】

乳児期の心の発達を、心脳問題に関わる「意識のハードプロブレム」を解明することを目指す新たな枠組みへと組み入れるための理論装置を示す。その上で「2か月革命」から「9か月革命」に至る初期の発達を意識の存在構造の根底をなしているものとしてその発達の構築を解明することを試みる。

【方法】

トマセロ、ロシヤ、大藪等の文献を素材にこれまで明らかになった乳児の心の発達に関する見解を、情報一意味の次元の構造化のあり方として再構成していく理論的考察を行う。

【結果】

乳児の初期の発達の心理学的側面はいわゆる「心の内面」の根底が構築されていく過程としてとらえることができるが、心の内面という言い方は、飽くまで比喩的なものであり、物理的・知覚的3次元空間における内側ではない。「今ここ」を超えて、という表現等からも分かるように内面の実質は物理的・知覚的4次元時空間における「今、ここ、この現実」を超えていくことであり、それを可能にするのが、4次元時空間にもう一つの次元である「情報一意味の次元」が付加され構造化されることである（この次元が素粒子物理学における余剰次元の概念と相同かどうかは今後の解明に待つ）。そして、その情報一意味の次元が発展的に構築され、複雑な動的構造を形成する過程が心の発達の骨格をなしている。「意識のハードプロブレム」と言われる問題の解決のためには、（恐らく情報をめぐる物理学的世界像のパラダイム転換と）このような「心のはたらき」を情報一意味の次元の問題として捉えていく新たな枠組みが必要とされる。

胎児の時点から母親の声を聞き分けているという点で、新生児もすでに「過去を引きずって」誕生しており、その意味で今ここを超えている存在であり時間軸において情報一意味の次元を実現していると言えるが、「基本的に行動が刺激と直に結びついていて、純粋に便宜的で意図をもたない」（ロシヤ）新生児は「今、ここ、この現実」に強く拘束され、情報一意味の次元がまだ萌芽的なものでしかない。その後養育者との「原会話」を通して、ターンテイキングの対面的なリズムが形成され、情報一意味次元の時間的側面が構築されていく。特に「2か月革命」において「行動と環境の間に心的な距離を必要」とするとされる「志向性」（ロシヤ）の萌芽的な現れは、空間的な意味一情報の次元の原基的形成としてとらえることができる。そして「生後4か月から6か月の間までに、人間が見せる資質的な手がかりにより敏感に」なり「「いまここ」を超えて、その人間がいかにふるまうかについて」（ロシヤ）認知するようになる。またほぼ同時期に、姿勢の安定や探索のスキルが成熟してくると共に a person stage から an object stage への移行が起こり、人や物体の同一性や変化という時間的情報一意味次元を発達させ、動的に安定化させていく。

この間、大藪の言う「対面的共同注意」「支持的共同注意」を経て、「9か月革命」において「意図共有的共同注意」が出現してくる。ここにおいて乳児は他者の視点の意味を理解し、仮想的に他者の視点に立ちながら、自らの視点との関係を把握するという「自己分裂的自己統一的事態」（廣松渉）を実現することになる。ここにおいて情報一意味次元が一気に進展し複雑に構造化することになる。また、自らの行為において目的一手段関係を実現できるようになり、それと共に他者の行為の意図性も理解できるようになる。さらに進んで、他者の視点に立ちながら、自らの視点と「自己分裂的自己統一的事態」を把握できるようになると、「他者を通して見た自分を知る」（トマセロ）ことができるようになり、自己感が複雑に構造化された情報一意味の次元に組み入れられる形で再構成されていく。このような他者の視点を常に潜在的可能性として含んでいる意識が「前反省的自己意識」の基盤となる。

【考察】

新生児や乳児の心理過程の考察は、どうしても成人の心理過程を読み込んでしまうことになるが、逆に言えば、成人の意識構造の重層的構造を解明していく発見的機会として考察することもできる。生命進化と情報処理の高度化の関係を系統発生的に辿ることが意識の解明にとって重要であるのと同様、個体発生的に辿ることもまた意識の根底的基盤構造の解明に役立つと言える。